

河原正博先生を送る〔含 略年譜・論著目録〕

河上, 光一〔他〕

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

1983-03-24

河原正博先生を送る

河原正博先生は、昭和二十三年四月、法政大学予科の教授としてご就任になされ、とくに同二十八年四月以降は、文学部史学科教授として、ご講義やご指導をいただきました。したがって、先生は実に三十五年の長きにわたって、わが法政大学に在職なされ、大学の発展のためご尽力下さったわけです。その間、史学科の学部・大学院の東洋史を担当される傍、主任教授、また法政大学史学会会長として、史学科のために足跡を残されましたが、本年三月をもって定年退任されることになりました。河原先生は古稀を迎えられましたが、お元気で研究を進められておられ、退任後も、大学院へは引き続きご出講いただくことになっております。今後史学科のためご指導、ご鞭撻をお願いいたすしだいです。次に先生のご経歴・ご業績を掲載し、さらにお人柄の一端を紹介し、学恩に感謝の意を表したいと思ひます。

河原正博先生略年譜・論著目録

〔略年譜〕

- 大正元年八月十一日 熊本県に誕生。
 昭和十二年三月 浦和高等学校文科乙類卒業。
 昭和十五年三月 東京帝国大学文学部東洋史学科卒業。
 〃 四月 同大学大学院に入学、和田清教授の指導

河原正博先生を送る

昭和十九年四月

をうく（昭和十八年三月まで）。
 南亞細亜文化研究所（所長白鳥清）研究員。

昭和二十年四月

文部省民族研究所助手。

昭和二十二年四月

東京帝国大学文学部における中国正史外国伝の研究助手。

法政大学高等師範部講師。

法政大学予科教授。

昭和二十四年四月

法政大学教養部教授。教養部学務課長を兼任（課長は昭和二十八年三月まで）。

昭和二十八年四月

法政大学文学部教授。

昭和三十五年五月

横浜国立大学文学部非常勤講師（昭和三十七年十月まで）。

昭和四十一年四月

法政大学大学院人文科学研究科教授。

昭和五十八年三月

法政大学文学部教授定年退職。

〔論著目録〕

- 『宋名臣言行録』上巻・中巻 岩波書店 昭和十九年・昭和二十三年。
 『東南アジアにおける権力構造の史的考察』竹村書店 昭和四十四年（山本達郎他十四名の共著）。
 『ベトナム中国関係史』山川出版社 昭和五十年（山本達郎他六名の共著）。
 『広西蛮酋の始遷祖について』『南亞細亜学報』2号 昭和十八

年。

「南漢劉氏祖先考」『東洋学報』31卷4号 昭和二十三年。

「宋初の水戦演習について」『和田清博士還暦記念東洋史論叢』

昭和二十六年。

「秦の始皇帝の嶺南経略」『法政大学文学部紀要』1号 昭和二十九年。

「蛮酋の内徙について」『法政史学』7号 昭和三十年。

「Odorico の Panten 国に就いて」『史学雑誌』64の11号 昭和三十年。

「儂智高の反乱と交趾」『法政史学』12号 昭和三十四年。（同論文は李榮村氏によって「儂智高の叛乱と交趾的關係」と題して漢訳さる。「国立編訳館刊」第一卷第四期、一九七二年十二月）。

二月）。

「省地・省民の意味について」『和田清博士古稀記念東洋史論叢』

昭和三十六年。

「宋書州郡志に見える左郡左県の左の意味について」『法政史学』14号 昭和三十六年。

「晋の戸調式の遠夷について」『鈴木俊教授還暦記念事洋史論叢』

昭和三十九年。

「晋の戸調式に関する一研究」『法政大学文学部紀要』10号 昭和四十年。

「宋代の殺人祭鬼について」『法政史学』19号 昭和四十二年。

「丁部領の即位年代について」『法政大学文学部紀要』15号 昭和四十五年。（同論文は朱振明・柳啓宇氏により「丁部領即

位年代考」——關於安南独立王朝成立年代的研究——と題して漢訳さる。「東南亜資料」第45期、雲南省歴史研究所東南亜研究室刊印、一九八〇年）

「宋初における中越關係」『法政大学文学部紀要』18号 昭和四十八年。

「前黎朝と宋朝との關係」『法政史学』29号 昭和五十二年。

「李順の乱に参加した旁戸について」『法政大学文学部紀要』24号 昭和五十四年。

「隋唐時代嶺南の酋領馮氏と南海貿易」『山本達郎博士古稀記念東南アジア・インドの社会と文化』昭和五十五年。

「隋代嶺南の酋領甯氏について」『法政史学』33号 昭和五十六年。

「象郡の位置について」『法政大学文学部紀要』28号 昭和五十八年。

河原さんと私

河上光 一

河原さんとの出会いは、大学に入学した昭和十二年である。それから今日まで、中間に大きな断層があるけれど、凡そ半世紀にわたる長いお付き合いである。

入学当時の河原さんは、学生服を端正に着こなした、物静かで寡言、彫の深い哲学者然としたマスクとともに、勤勉にして実

直、近寄りがたい印象であった。畏敬の念を抱かせたものであった。

大学での講義の時間割は、各学科が発表する時間表の中から、面白そうな講義を拾い出し、学生がめいめいに作成することになっていた。しかし卒論提出の条件や卒業に必要な単位数を勘案して作成しなければならなかったから、誰もが同じような時間割を作成する結果となり、特に第一年度は、河原先生とも殆んどの講義で顔を合せることになった。こうして生まれた親しいふれ合いの中で、河原さんは勤勉実直な中に、極めて優しい思遣りのある方であることがはつきりしてきた。書取れなかったノートのブックなどは河原さんに聞けば立ちどころに穴が埋まった。親切丁寧、正確な返事が返ってくるからである。しかも暖かな余韻を残してである。実の兄貴ともいえるものであった。

昭和十二年といえば、日本は急速に軍国主義・全体主義へ傾斜していった時期である。学生の間では、却って自由等について議論が盛んに戦わされた。論戦はよく図書館前の芝生に車座になって行われたものである。河原さんは、こうした論戦に深く関ることとは無かったと思う。しかし、じっくり両者の論拠を聞いておられたのであろう、最後に発せられる一言は、千金の重みを感じさせたという記憶がある。それは「夜明け前」の主人公半蔵に譬えることが出来るかも知れない。半蔵は中仙道馬籠の宿という中央から遠く離れた所に住み、そこに伝えられる僅かな材料から、日本や世界の大勢を冷静に正しく把握した。そしてその結果発せられた数少ない言葉は周囲の人々の心を打つというものであった。

河原正博先生を送る

針の穴から物事を優れた洞察力と平衡感覚をもって見詰める態度は、河原さんの学問の土台であり、その後の成長の基になっていたと思う。

卒業論文は、溪峒蛮の研究であった。宋代溪峒蛮は湖南省を中心にして広西省およびそれらと接する地方に居住した蛮族であるが、神宗の時代に経略が行われて中国化していった。羈縻政策を抜ったものであるが、スケールの大きさ、些細な史料を見据えてこれを分析し、理路整然、一步一步正確な史実に接近してゆく。昭和二十三年東洋学報に発表された「南漢劉氏祖先考」は、それまで劉氏はアラブ人であろうとされていたのを、劉氏は番禺すなわち嶺南の蛮夷でなければならぬとされたものであるが、それは少ない史料を見据え史料批判の結果の精緻な結論であった。以後の河原さんの論稿は、この史料を飽造ジーツと見詰めてゆく態度で貫かれている。河原史学の真髄というべきものであろうと思う。

河原さんは昭和十五年に大学を卒業し、大学院に進まれた。私には九州に赴任した。地理的に遠隔でもあり、泥沼化した大陸での戦、そして太平洋戦争、敗戦、敗戦後の未曾有の混乱は、知人・友人の消息を殆んど不明にしてしまった。二十六年上京した私は河原さんが法政大学に元気で勤めておられることを聞いて安堵したものである。

四十二年、法政に出講するようになって、再び親しく河原さんの温顔に接することが出来るようになった。講義前後の僅かな時間、教授室での雑談は尽きることが無かった。現在興味を持って

調べておられる問題についての河原さんの話は、秘められた情熱が迸り、却って若返られたのではないかとさえ感じさせられた。宋代四川におきた王小波・李順の叛乱に關して出てくる「旁戸」について、宋史劉師道伝に見える「川峡豪民多旁戸」をどのように解すべきか。すなわち「川峡では豪民が旁戸を多くもっている」と解するのか、「豪民の中には旁戸が多かった」と解すべきなのかということである。この短い一文は、解の仕方、乱の性格その歴史的意義、また宋代四川の佃戸に対する見解に相違が生ずる重要な一文である。河原さんは、後者の見解をとられるわけであるが、この話は河原さんの情熱・迫力を感じないわけにはいかなかった。短い史料と言えども、愛情を持って十分にこれを見据えられるのである。これは、「李順の乱に参加した旁戸について」として法政大学文学部紀要第二十四号に収められている。

河原さんは情熱を深く藏した永遠の青年である。

私の講義は河原さんと同じ時間であったが、先に講義を終わられたときは、必ずといって好い程、教授室で待っていて下さった。講師というのは、専任だけでは出来ない分野の講義を特に御願いのだから粗末には扱えないと言われたことがあった。有難いことである。雑談の中にこんな話があった。「東京行進曲」という流行歌に『広い東京恋ゆえ狭い』というのがあるが、今の若い人は、今日は銀座、明日は新宿、次は渋谷、次は浅草という工合にデートを重ねるから、さしも広い東京も、またたく間にデートの場所が無くなってしまふ。東京は狭いなあという意味に解釈するのだそうのである。私はその結論は「今の若い者は……」

であろうと思つて聞いていたらさにあらず。こうした解釈が生まれる環境の変化と、こうした環境の中で成長する若い人というものを十分念頭に置かねばならないということであった。河原さんの口から流行歌だの恋だのという言葉が出てくるのも奇異に思うが、若い人に対する思遣りを雑々と感じたことである。史料をしたたかに見詰める学問的態度が、教育面に昇華したものであらうと思う。

いま、河原さんを送ることは、法政大学にとって一つのマイナスであらう。しかし、これは定年制という一つの約束によるもので致し方ない。今後の河原さんの御健康と御活躍を祈り、後輩を長く指導して頂けるよう御願ひする次第である。私にとってあの雑談が聞けなくなるのが何よりも淋しい。

河原先生と史学科

安 岡 昭 男

東洋史の河原先生が五十七年度をもって去られることは、法政の史学科にとって、ひとつの時期を画するもののように思える。外国史では八年前に、西洋史の竹内先生が名誉教授になられているが、今度、河原先生が退かると、残る専任者のうちでは、日本史の私が最も古くなつてしまふ。

先生は東洋史の概説・演習・特講はもとより、教職課程を最後まで担当され、通信教育では毎年夏期の教室授業のほか、春秋各

期および冬期に隔年講義された。授業をこれほどまでにわたって負担されたのは先生ぐらいいであった。史跡見学などの行事にも、つとめて参加して下さった。学内外を通じて、目立つことは為さらなくても、平常の事柄はきちんと果たされたのである。こういう先生によって大学の教育は支えられているのであり、学生たちは河原先生の真価を知り、真剣に教えて下さった先生への感謝の念をいつまでも心に留めており、私もその一人である。また学科あるいは一般の問題に対して、言葉すくなくに洩らされる判断が的確であることを、あとあと噛みしめるのが常であった。

二十数年も以前になるが、健康を取り戻されてからの先生は、お身体を大事にされながら休まずお勤めになった。強健さを過信する者よりも、用心している人の方が長生きするものである。先生が今後もお元気で御研究をお続けになられるようお祈りし、史学科の将来を見守って下さることをお願い申しあげたい。

河原先生を送る

村上 直

文学部史学科の河原正博先生が、本年三月三十一日をもって定年退任されることになった。先生が法政大学の専任教授になられたのは昭和二十三年四月であるから、まさに戦後の法政大学の歴史をそのまま歩まれ、大学の発展のためにご尽力なされたわけである。その間、先生が研究に教育に、史学科の柱となっていただ

いたことに、心から感謝を申し上げるしだいである。

私が史学科の専任教員になったのは昭和四十六年十月であるから、先生とご一緒に研究室でお話するようになったのは、丁度、十一年五か月前ということになる。私が専任教員になった頃は、今とは違って大学騒動のまっただ中であり、キャンパスは異常な雰囲気につつまれていた。そのため落着いて研究や講義ができなかった時期であり、気持のうえでもきわめて不安定なときであった。しかも、岩生先生がその年の三月に定年で退任され、丸山先生が五月に亡くなられるという、史学科が最も手薄なときであった。この時期に竹内・河原両先生が、しっかりと苦難の史学科を支えていただいたことを今でも忘れることはできない。

河原先生は、どちらかというと寡黙な方である。しかし、それでいて学者として、しっかりとしたお考えをもち、強い信念をもっておられる方である。ときに言葉数は少ないが、ご指摘なさる適切なご意見は、私たちにとって、いつも貴重な指針になっていたのである。

かつて、渋谷駅から東横線に乗って帰宅するのは、史学科では竹内・河原両先生と私の三人であった。教授会や史学会の行事のあとなど、いつも帰りはご一緒に、車中での話は、もちろん、雑談ではあったが、私にとっては楽しいひとときであった。その後、豊田先生も加わられたので、一時は四人のときもあった。東横線では学芸大学駅で竹内・豊田両先生が下車され、河原先生と私の二人となり、武蔵小杉駅で私が下り、河原先生が日吉駅まで行かれるという順になっていた。今ではこの東横線も河原先生と

私の二人だけになったが、最近私の帰りが何かと不定時になってしまったため、先生とはかつてのように一緒に帰ることが少なくなっていました。私にはこのことが何となく残念に思えてならないのである。

先生と私は、専門が違うため、研究の上では直接、ご指導いただくことはなかった。しかし、昭和五十七年度の秋の法政大学史学会でのご講演や今年の二月五日の最終講義を拝聴し、手堅い実証的研究の上に論旨を展開されていく、先生の学風に改めて感銘したしだいである。

河原先生が大学の専任を退かれることについては、学生諸君も残念でたまらないようである。たまたま、地方で通信教育部の史学科の学生諸君に定年ご退任の話をしたところ、先生のご講義を非常に懐かしがっていた。このことは、もちろん本校の通学生の諸君の場合も同じであろう。先生は専任教授を退任なされても引き続き、一日、大学院にはご出講願うこととなっている。これからも、ご健康に留意され、なるべく史学科の行事にも参加していただき、私たちをいつまでもお導き下さるようお願いするしだいである。

思 い 出

笹 目 善 一 郎

昭和二十四年はじめて河原先生の御講義に出席した我々のつづきでした。高等師範部地歴科を三月に卒業して、史学科に入ったばかりの我々には、五代十国の一つ、広州に都した南漢なんて国は皆目わかりません。

ガリ版刷ですが、一応のり付けされた十数ページの資料を頂いて、あの混沌錯雑たる十国の推移を手ほどきして頂いたのです。その頃は前年（昭和二十三年）四月から「夏時間」が施行されていましたから、夜学の一時間目は今の午後四時半に始まるので、あの嘉悦学園の教室もまだ明るく、夜学生には大助かりでした。

私は学生委員をしていましたから、幾度か先生に用を言いつかりました。先生はこちらが恐縮する位に物腰低く、やわらかに色々とおっしゃいますが、こと講義になると、あのとがったお顔の眼差しきびしく我々に迫り、どうにもきつかったことを憶えています。

十年程前のことですが、それまでW先生が担当されていた法政大学通信教育の東洋史概説を先生が御担当なさることになり、私は引続きその添削員をやるよう御指示を受けました。五十年七月には待望の通教テキスト「東洋史概説」が刊行され、二四〇余ページの中に現代史までも含まれ、先生独特の簡にして要を得た叙述は、通教生は勿論それ以上に私が助かっております。

この度、先生が御退職なさると伺いました。誠に淋しいことでもあります。我々古い卒業生にとっては、「竹内・丸山・河原」三先生に手とり足とりされて史学の道に踏み込んだのであります。

幾度となく停電に妨げられた終戦後まだ日の浅い夜学の思い出はこの三先生と共にあるのです。丸山先生は夙にみまかり、竹内先生は八年前最終講をなさり、今、河原先生をお送りしようとしています。同学のH君が言うように、史学科の夜学時代の先生方が全て法政から去れることになりました。時の流れは留りませんから、いつかはこうなると判っていても、その時にならないと実感になりません。そしてその時になって慌てるのです。私もそうです。三十年來、東洋史についてお尋ねすることが多々ありましたのに、そのうち先生にお会いして……と言っているうち今日を迎えました。先生が法政を去られることは誠に淋しいことですが、今よりは少しお閑な時もありでしょう。不肖初老の昔の学生に往時に戻って改めて御教示下さる時間を、どうか先生、とっておいして下さい。

先生の末永い御健勝をお祈りしつつ擲筆いたします。

(新制1回卒)

厳しかった演習

星 野 良 作

史学科四年生の時のノートに、東洋史演習・河原正博教授「宋名臣言行録（五朝名臣言行録）」（昭和三十四年度・八六五番教室）と題する一冊がある。

演習は河原先生の用意された白文のプリントで進められた。漢

河原正博先生を送る

文の素養の乏しかった私には全く厳しい演習であった。河原先生の講義のことを想う時、まず脳裏に浮ぶ。受講生もまばらになっていった。先生と二人きりの演習が何度かあったように思う。

前記ノートの最後、三十五年一月二十三日の頁に最終レポート作成の指示が記されているから、何とか一年間を過ごし、単位をいただけたのであるが、私が何とかこの演習を凌げたのには実は裏がある。誰に教わったか忘れてしまったが、演習が始まってどれほどたってからであろうか、私は神田で和田清校閲・河原正博訳註『宋名臣言行録（上）』（岩波文庫、昭和十九年十一月刊）を手に入れ、本書によって予習ができたからである。なお当時本書、奥書に、先生は「昭和十五年東京帝国大学文学部東洋史学科卒業」、昭和十八年三月付で記された和田清先生の校閲の辞（序文）に、「歳余にして成った本書の内容は、全部同君（河原先生―星野注）苦心の訳業である」と見えるのに感動し、自分に鞭打った記憶をもつ。

先生は、その学風を偲ばせる肩に力を入らない正確で枯れた実に美しい板書をされる。「隋」と「随」の違いをはっきりと学んだのは東洋史概説の時間だったと思う。また先生の「干支算出表の作り方」（『法政大学史学科だより』十五、昭和三十三年七月）によって当時作成したものはいまでも役立っている。

私は故丸山忠綱先生のご指導をうけ、日本古代史研究への道へ進んだが、河原先生のご指導は四半世紀後のいまに及ぶ。改めて感謝申し上げるとともに、ご健勝とますますのご発展をお祈りす

る次第である。

河原正博先生へ

白井千鶴

昭和四十九年、学生運動は、下降線をたどりつつあったとはいえ、法政大学は、そのただ中に在り、不安定な時期にありました。また、私達は、学生として、人間としての自分自身に不満だらけで、希望と絶望の間で、上昇と下降を繰り返す精神的な弱さを抱えながらより高くのぼりつめたい思いに焦る青春のまっただ中に居りました。

河原先生にお会いしたのは、そんな騒々しい環境の中で自分を見失いがちな時でした。

小じんまりとした東洋史ゼミは、頁を繰る音さえ響き、少し微臭い資料に落ち付きを見出せる静かな場所、厳格な時間でした。史記をテキストに用いた授業で、先生は、文章の一節ごとに細かな注釈を加えられ、それは、どの何の資料によったものであり、また、それに対する逆の説は、ここから出ている等と膨大な量の資料をあげて下さったものです。

先生は、熱し易く、全てに簡単に絶望し、また、焦燥感におそわれがちな私達に対し、手とり足とりでなく、一定の距離を隔てて、深い理解をもって、仏の手の中の孫悟空を見守るように導いて下さったように思えます。そして、また、私達が河原先生に傾

倒するのは、授業を離れても、その優しさを示して下さった所にあるのです。

先生は、御酒はたしなまなかったのですが、学生のコンパにも必ずお付き合い下さって、毎回楽しいお話しや歌をご披露して下さいました。特に、追出しコンパの際に唄って下さった「月の砂漠に昔の名前で出ています」は名(迷)曲中の名曲として忘れられません。また、先生は、甘い物が好きで、女子学生のみならず、男子学生まで、神楽坂の「紀ノ膳」には、何度かごいっしょさせて頂き、その度ごとに先生とより親しくお話する機会を持つことができました。

卒業後五年目、本年夏、東洋史ゼミの昭和五十二年度、五十三年度卒業生の合同のゼミ会を開きました。ご出席下さった河原先生は、大変お元気で、当時と少しもお変わりなく、以前にも増して熱っぽくお話になられるお姿に小さなゼミ教室での緊張気味の授業が懐しく甦りました。今ほんの少し成長した私達にとって、授業や史跡見学会、その他折あるごとに先生がおっしゃられた中庸ということをいくらか理解できるようになっていました。その日も先生は、中庸であることの重要性、しかしながらその難しさについて熱心に説かれました。学生の頃から私達は、凡庸であることを一足飛びに踏み越えて、もっと高みに至ろうとして焦燥感や自暴自棄の虜になっていたことを改めて恥かしく思いました。

卒論指導は、卒業の時一応終了にして頂けたのですが、人間的な面でのご指導はまだこれからお願いしなくてははいけません。

うです。

この度、先生の退任されることを伺い、先生の素晴らしい授業とお人柄に、もっと沢山の後輩達がふれてほしかったのにと、非常に残念に淋しく思いました。

私達は、先生から十分すぎる程のご指導を頂きましたことを、大変幸せに思っております。

河原先生、永い間ありがとうございました。

(昭和五十三年三月卒業、海洋科学技術センター勤務)

河原正博教授の最終講義

本学文学部史学科教授河原正博先生は、昭和五十八年三月三十一日をもって定年退任されることになった。ついで、これまでの先生の学恩に感謝するため、二月五日(土)、午後三時、家の光会館(東京都新宿区市ヶ谷船河原町)で午後三時から文学部及び史学科主催の最終講義と懇親会が開かれた。

当日は安岡昭男教授の司会により始まり、第一部の最終講義は、加来彰俊文学部長の挨拶について倉持俊一教授から河原先生の研究者としてのご経歴、ご業績についての紹介があり、引き続き河原先生の「少数民族の漢化過程」と題する最終講義があった。出席者は先生の長年の研究に基づく実証的な手堅い研究成果の一端を拝聴することができ、深く感銘を受けた。講義を終わって、河原ゼミ(東洋史)を代表して周雪清さん、ゼミ卒業生を代

河原正博先生を送る

表して白井千鶴さんから花束贈呈が行われ、伊藤玄三教授の閉会の辞で終了した。ついで記念撮影、第二部の懇親会へ移った。

懇親会は、中野栄夫助教授の司会で、まず史学科を代表して村上直教授の挨拶、岩生成一・元主任教授(現・学士院会員)の音頭によって乾杯。引き続き竹内直良・岩永博の両名誉教授、講師の関野雄・佐久間重男・河上光一の諸先生、卒業生の笹目善一郎・丹治健蔵の両氏、芥川竜男・大森実両教授、地理学科の渡辺一夫教授その他の方々により、それぞれの立場から河原先生の功績やお人柄についての話があった。懇親会は和気あいあいのうちに進められ、終りに河原先生の謝辞、倉持俊一教授の閉会の辞について法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二〇名。

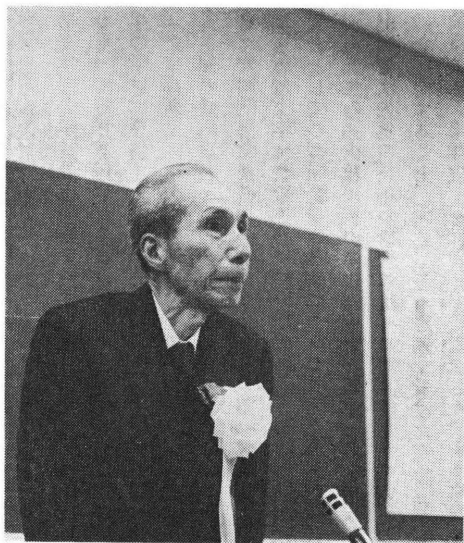
最終講義要旨

少数民族の漢化過程

河原正博

黄河の中流域すなわち中原の地に興った漢民族の、南方揚子江流域地帯への進出発展は中国史の大きな流れであった。

その際、漢民族は郡県を設置して、その進出地域を確保し、更にその開発を発展させていったのであって、この郡県の設定に伴って当然のことではあるがその地の非漢族——古くは華夷思想に



よって「蛮」と呼ばれた——と交渉し、関連をもつに至ったのである。しかし何といっても分散的、個別的で、小社会群であるこの地帯の非漢族の各グループは漢民族による郡県制という巨大な機構、強大な組織力の下では、大きな影響を受けざるを得なかったわけである。

宋会要の蛮夷五や桂海虞衡志その他の宋代の史料に見えるところでは、非漢族の聚落に対して、その大小にしたがって、名前だけではあるが、何々州、何々県という名を授け、その各々の酋長をそれぞれその州知事、県知事に任じ、あるいは宋の寨の寨将となし、これらの酋長を通じて間接的な統治をおし進めようとして

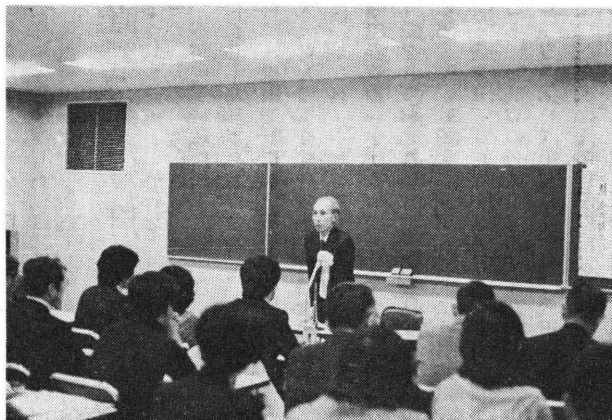
いる。一体、酋長とその部民の関係を見るに、彼等は互に言語嗜好を同じくし、朝夕相接し、婚姻相通じているので、その酋長は内部の利害、情偽によく通じ、また部民から信服されているので、これらの酋長に宋朝の職名を授けて彼等を通じて間接的統治を行うこととしたわけである。なお酋長はこのように州知事、県知事と呼ばれてはいるが、実際、彼等は中国内地でいうと県の下にある郷村の官治補助機関として徴税、治安の役にあたった里正、戸長に相等する下級な者と考えられていたのである。とにかく酋州を羈縻し、中国州県の防衛の役目を負担させたもので、それがいわゆる羈縻州県で、中国内地の州県と同格ではないことは申すまでもない。

中国の州、県及び寨を中心とした図解的に同心円を画けば中心に漢人（王民、省民）が居り、次の地帯に漢化の程度の濃きものと——いわゆる「熟蛮」——、更に次の地帯にはそれに比較すると漢化程度の淡きもの、さらに外縁にはほとんど漢化の及ばないもの——いわゆる「生蛮」——が層をなして配列されていたこととなる。嶺外代答二巻、海外黎蛮に、「黎人半能漢語。十百為群。変服入州県城市。人莫弁焉。日将晚。或吹牛角為声。則紛紛聚會。結隊而歸。始知其為黎也」とあって、州県の近郊に聚落をなして居住している黎人が如何に漢化しているかを目の前に見るが如く描写している。

さて宋の初め四川の地で起きた李順の乱が宋朝の四川支配に大きな動揺をあたえたことは勿論であるが、特にこの乱が唐末から宋朝にかけての中国社会の変革の時期に起きているので、この乱

の性格あるいは歴史的意義が問題となる。この際、この乱に参加した旁戸の、豪氏への隸属関係が問題となり、それはまた宋代の佃戸問題の解明、すなわち宋代佃戸の身分的隸属性の問題と深く関連してくることとなるのである。

一体、問題の旁戸に関する史料はただ太宗実録^{卷八七} 至道二年八月丙寅の条『宋会要』刑法禁約、至道二年八月二十八日の条もほ



河原正博先生を送る

ぼこれと同文」と宋史^{卷三} 劉師道伝だけで、史料がすくないことも旁戸につき考察する場合に注意すべきことであるが、この乱のおこった四川の地、特に陝路や夔州路の地が「蛮漢雜居」の地であったことにも特に関心をもつべきであろうと考える。さきに私は「李順の乱に参加した旁戸について」の論考を発表し、旁戸は旁寨下の戸で、酋長（宋の寨将あるいは刺史に任ぜられているもの）、その部民、すなわち宋の羈縻下にある「蛮夷」すなわち熟夷ではなかったらうかとの考えを述べたが、その後、宋史^{卷一} 兵志五、夔州路義軍土丁、壮丁の条に、「思州、洪杜・彭水県有義軍指揮使、巡檢将、砦将、科理、旁頭、把截、部轄将、并壮丁總千四百二十二人」とあって、義軍の指揮官として、砦将、把截などと共に、旁頭の名が見えているのを知った。この旁頭も、おそらく旁寨の壮丁の小集団の指揮官の意であろう。砦（寨）将に「蛮」の酋長が任ぜられていることはすでに述べた如くである。